

DVD『栄光のフィレンツェ・ルネサンス』 (5枚組 NHKソフトウェア発行)

蜷川 順子

NHKスペシャル『マルチェロ・マストロヤンニのフィレンツェ・ルネサンス』(1991年)として放送された番組を、今でも覚えている方はおられるだろうか。趣味の良い暖炉の前で、ゆったりしたソファに腰掛けたマストロヤンニが、知的で粹な口上を述べて始まる6回連続のセレブな番組。奇跡の町の誕生から花の都の落日まで、フィレンツェを舞台に繰り広げられる芸術活動の多角的な紹介は、泰西名画といえど印象派だった西洋美術鑑賞界に、その王道の在処を知らしめるのに十分な内容だった。

ギリシア・ローマ神話やキリスト教、古典文学や民間伝承、そして何より世界史の知識がなければ、十分な理解が難しいとされるルネサンス期の美術。それを、これだけの規模で堂々と番組にすることができたのは、バブル期の強い経済力に後押しされて頻繁に行われた展覧会や、年々増加した海外渡航者が現地で目の当たりにした本物の力によって、厚い受容者層が形成されたということなのだろうか。

ところで、美術館などでじっくり本物を見た後、いつの間にか足腰に痛みを覚えていたという経験のある人の中には、ソファに腰掛け、心地よく響く解説の声や感情の動きを演出してくれるBGMの入った、テレビやビデオ番組で絵画を鑑賞する方が、本物を見るより良いと思う人がいるかもしれない。

ドゥルーズの言葉を借りるなら、「連続の不動の断片」を「均質な時間にそって送り出

す」映像は、実際は画面に限なく広がる色や形に従って緩急あるべき鑑賞を教導し、せいぜい一時停止程度の抵抗を許してくれるに過ぎない——したがって、ちなみに、通常の映画作品を一時停止で静止画面にして眺めることは、実際かなりパラドキシカルである。

「美術史の授業でビデオを使うと自分の授業にならない」と言われた某教授の言葉を思い出しながらも、しかし筆者は、学生の関心を引き起こすためという金科玉条の下、再断片化というささやかな抵抗も試みつつ、映像番組になった絵画資料を授業で適当に使用している。

おそらく、ここちよい絵画鑑賞体験と健全な教養の習得を目的に番組を制作された方にとっては、一時停止や巻き戻しなどで解体された断片が鑑賞されることは、予想外と言わないまでも、想定外であろう。

DVDとなった資料は、しかしながら、このことを予想し、想定している。「固定し、分割し、再構成するというやり方で、ものに対して働きかけるのを本質とする」(〔篠原資明『ベルグソン——〈あいだ〉の哲学の視点から』岩波新書、二〇〇六年]より)知性の活動に、より即応した装置なのである。知性は、人間の思考の中核をなすものであるから、実際これは、大学が備えるべきアカデミックな資料ということができる。

ジョットからマニエリスムまで5回に再編され、もはやマストロヤンニの姿はないものの、確かなナレーションとBGMによって、

ビデオとしての鑑賞も十分に保証されている。それに加えて、DVDならではの機能を活用し、画面を選択再生したり、文字情報や解説を読んだりすることができる。また、インデックスにより目的の作品を検索したり、地図上の地点からそこにある作品の画像を3D的に取り出したりすることができる。すなわち美術全集や辞書の機能も兼ね備えている

のである。また、インデックスを利用して様々なカテゴリーへとグループ化することで、思いがけない発見ができるのも、電子媒体のメリットであろう。したがって本資料は、教室での集団鑑賞ばかりでなく、個々のアカデミックな知的要求も十分に満たしてくれるはずである。